

令和 2 年度

いじめを生まない土壌づくりのための基本的な方針

(いじめの防止等のための基本的な方針)

春日部市立江戸川小中学校
(令和 2 年 4 月改訂)

はじめに	1
第1 いじめの防止等のための基本的な考え方	
1 いじめの定義	1
2 いじめの防止に対する基本的な考え方	1
第2 いじめの防止等のために本校が実施する取組	
1 いじめの防止等の対策のための組織の設置	3
2 本校におけるいじめの防止等に関する取組	
（1）いじめの未然防止のための取組	3
（2）いじめの早期発見のための取組	6
（3）いじめに対する早期対応	7
第3 重大事態への対応	
1 重大事態の定義	11
2 重大事態への対応の流れ	11
第4 その他いじめの防止等のための対策に関する重要事項	12

はじめに

全国的に見て、児童生徒へのいじめは依然深刻な状況が続いています。そのような中で、「いじめ防止対策推進法」が成立し、平成25年6月28日に公布されました。

本校では、春日部市教育委員会が推進する「伝え合い 学び合い 育ち合い 思い合いがうれしい教室」を目指し、学校教育目標である「自ら学び、考える子（確かな学力）・心豊かで、思いやりのある子（豊かな人間性）・たくましく生きる元気な子（健やかな体）」の実現に向けて全職員一丸となって、教育活動を展開しております。すべての子どもたちが笑顔あふれ、夢と希望を胸に抱き、輝く未来に向けて健やかに成長することを切に願っています。

現在、社会問題となっているいじめから子どもたちを守るために、これまでも「いじめは絶対にしない、させない、許さない」という信念のもと、いじめを生まない土壌づくりのための様々な対策を講じてきました。それらをさらに確実なものとするため、いじめの問題に関する総合的な対策を策定し、いじめの防止に取り組んでいきます。

第1 いじめの防止等のための基本的な考え方

1 いじめの定義【いじめ防止対策推進法 第2条】

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

※一定の人的関係について、同じ学校に在籍しているのは一例に過ぎず、例えば現在は違う中学に通う生徒であるが、小学校では同じクラスに在籍していたケースや、学校とは関わりのない活動において接触のある場合なども「一定の人的関係」としてとらえる。

2 いじめの防止等のための基本的な考え方【いじめ防止対策推進法 第13条】

（学校いじめ防止基本方針）

学校は、いじめ防止基本方針又は地方いじめ防止基本方針を参酌し、その学校の実情に応じ、当該学校におけるいじめの防止等のための対策に関する基本的な方針を定めるものとする。

法の趣旨を踏まえ、本校の実情に応じ、いじめの防止等のための基本的な方針（以下「学校基本方針」という。）を示すとともに、いじめの防止や早期発見、いじめへの対処が、本校において組織的、計画的かつ迅速に行われるよう、講ずるべき対策の内容を具体的に記載する。策定した「学校基本方針」については、ホームページへの掲載等により、保護者や地域住民が内容を容易に確認できるようにするとともに、入学時や各年度初めに児童

生徒、保護者、関係機関等に説明する。

また、いじめの防止等に係る日常的な取組の検証・見直しを図る仕組みや、本校におけるいじめの防止に資する啓発活動や教育的取組を具体的に定める。

更に、取組の実効性を高めるため、本校の学校基本方針が、実情に即してきちんと機能しているかを点検し、必要に応じて見直すPDCAサイクルを盛り込む。

第2 いじめの防止等のために本校が実施する取組

1 いじめの防止等の対策のための組織の設置【いじめ防止対策推進法 第22条】

学校は、当該学校におけるいじめの防止等に関する措置を実効的に行うため、当該学校の複数の教職員、心理、福祉等に関する専門的な知識を有する者その他の関係者により構成されるいじめの防止等の対策のための組織を置くものとする。

本校は、いじめ防止等の対策を実効的に行うための常設の組織として「元気アップ推進委員会」（以下「推進委員会」という。）を設置する。

推進委員会は、本校の生徒指導委員会を母体とし、原則として校長、教頭、教務主任、生徒指導主任、学年主任、養護教諭、教育相談主任で構成するものとする。

また、推進委員会は学校基本方針に基づく、いじめの防止等に関する取組を実効的に行う際の中核となる組織であり、必要に応じて心理や福祉の専門家、弁護士、医師、教員・警察官経験者、PTA、地域の方など外部専門家等の参加を図りながら対応することで、より実効的ないじめ問題の解決に資するよう工夫する。

推進委員会の具体的な役割は、次のとおりである。

- ア 取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正の中核としての役割
- イ いじめの相談・通報の窓口としての役割
- ウ 情報の収集と記録、共有を行う役割
- エ いじめの疑いに係る情報への対応を組織的に実施する中核としての役割

2 本校におけるいじめの防止等に関する取組

本校は、春日部市教育委員会と連携して、いじめの防止や早期発見、いじめへの迅速な対応等に当たる。

（1）いじめの未然防止のための取組

いじめはどの児童生徒にも起こりうるという事実を踏まえ、全ての児童生徒を対象に、いじめに向かわせないための未然防止に取り組む。

未然防止の基本的な考えとして、学校は、児童生徒同士心の通じ合うコミュニケーション能力を身に付け、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できるような授業づくりや集団づくりを行う。また、集団の一員としての自尊感情を高めていくことにより、互いを認め合える人間関係・学校風土をつくっていく。

更に、教職員の言動が、児童生徒を傷つけたり、他の児童生徒によるいじめを助長したりすることのないよう、指導の在り方に細心の注意を払う。

ア 学級経営の充実

児童生徒は学校生活の大半を学級で過ごすため、いじめの発生を防止するには、学級づくりがとても重要であることから、次の点に留意し、学級経営の充実を図る。

「居場所づくり」・「絆づくり」と「自己有用感」

(ア) 児童生徒が安心して学校生活を送れるよう配慮する。

- ① 児童生徒の気持ちを共感的に受け止める。
- ② 居場所をつくる。
- ③ 見守る。（「いつもどこかで先生は見守っている。」）
- ④ 規準を示す。（「～してはならない。」ではなく、「～なときには～する。」）

(イ) 意欲や元気の源になるエネルギーをたくさん与える。

- ① 分かる楽しさを与える。
- ② 自分のよさや自分との違いのよさを認める。（「これまで気が付かなかった自分や級友のよさを先生が教えてくれた。」）

(ウ) 児童生徒が自分の周りに起こる様々な問題を解決しながら、他者と調和的に生きていくための社会的能力を育てる。

(エ) 児童生徒会活動など児童生徒が自主的に取り組むいじめ問題への取組を支援する。

(オ) いじめに向かわせない、主に学校で取り組むべき課題は、

・あいさつ・学力・自己有用感 である。

きもちのよい挨拶をし（きちんと授業に参加し）、基礎的な学力を身につけ、認められているという実感を持った児童生徒を育成する。

イ 道徳教育の充実

道徳の授業を通して、児童生徒の自己肯定感を高め、すべての教育活動において道徳教育を実践し、人権尊重の精神や思いやりの心を育てるために、次の点に留意し、道徳教育の充実を図る。

(ア) 学校の全教育活動との関連のもと、道徳教育推進教師を中心とした校内の指導体制の充実や児童生徒、学校、地域の実態に応じた指導など、児童生徒が日常生活に生かせるよう指導を工夫する。

- ① ボランティア活動や社会体験活動、自然体験活動等、様々な体験活動を実施することにより、一人一人の児童生徒が存在感や成就感を感じ、社会や他者と適切にかかわり、好ましい人間関係を築けるよう心の醸成を図る。
- ② 家庭や地域社会との共通理解を深め、連携を図りながら、児童生徒の心の成長と豊かな人間性の醸成を図る。

(イ) 「彩の国の道徳」「指導資料集」を活用し、児童生徒一人一人の自尊感情を高めていく。

(ウ) 「春日部の道徳」を用い、「活用事例集」を活用した、いじめを生まない心の教育を進めていく。

ウ 教職員の意識向上

「いじめの未然防止」として最も大事なことは「何も起こっていないときの指導の大切さ」である。いじめを未然に防ぐことやいじめが起きたとしても早期に解決が図れるようにするために、教師一人一人が普段の指導について謙虚に振り返るために、次の点に留意する。

- (ア) 児童生徒の悩みを親身になって受け止め、児童生徒の出すサインを、あらゆる機会を捉えて見逃さない。
- (イ) 自分の学級や学校にも深刻ないじめ問題が発生するという危機意識を持ってあたる。
- (ウ) いじめられている児童生徒を守り通すことを最優先に指導・支援する。
- (エ) 教師の不適切な認識や言動、差別的な態度や言動が児童生徒を傷つけたり、他の児童生徒によるいじめを助長したりすることに注意する。
- (オ) すべての児童生徒が授業に参加でき、授業場面で活躍できる授業づくりをする。
- (カ) チャイムが鳴ったら着席するという習慣や、授業中の正しい姿勢の徹底、発表の仕方や聞き方の指導など、授業中の規律の指導を行う。

エ 保護者同士のネットワークづくり

「いじめの未然防止」には、保護者の協力が不可欠であり、特に、保護者同士が知り合いだといじめにブレーキが掛かることが多い。そこで次の点に留意し、学校でも保護者同士の関係づくりを図っていく。

- (ア) 学級担任等がコーディネイト役となり、学級規模で保護者同士のネットワークづくりを進め、いじめ等の問題行動等の情報交換や対策について話し合う。
- (イ) P T A活動を通じて、いじめの防止等のための保護者の役割についての啓発を図る。
- (ウ) 構成的グループエンカウンターなど、時期やタイミングを見計らった適切なエクササイズを取り入れた保護者会を実施するなど、保護者同士が話ししやすい環境をつくるための工夫をする。

オ インターネットを通じて行われるいじめの防止

児童生徒がインターネット上のいじめに遭遇しないために、情報モラルの徹底を図ることが大切である。そのために、次の点に留意する。

- (ア) 学活等を活用して、ネット問題について児童生徒向け学習会を毎年度実施する。
- (イ) 「青少年のネットモラル啓発DVD」等の具体的な資料等の活用を図る。
- (ウ) 児童生徒の意識啓発とともに保護者の意識啓発に力を入れるため、保護者対象ネット意識啓発講演会を実施する。

カ 春日部市元気アップ推進委員会が取り組む事業への参加

「いじめ・不登校」問題の解消に向けて、春日部市が重点的に取り組む「スーパー元気さわやかキャンペーン」に対し、本校でも次の点に留意し、重点的に取り組んでいく。

(ア) 児童生徒の実態に応じた取組を行う。

① いじめに関する資料を用いた道徳授業、学級活動

② 児童生徒が主体となって運営する児童生徒集会

(イ) スーパー元気さわやか集会に積極的に参加していく。

① 代表者による作文発表

② 保護者、地域住民、小中学生との意見交換

(2) いじめ早期発見のための取組

いじめは大人の目につきにくい時間や場所で行われたり、遊びやふざけあいを装って行われたりするなど、大人が気づきにくく、判断しにくいことが多い。

このことを教職員は認識し、①児童生徒のささいな変化に気づくこと、②気づいた情報を確実に共有すること、③（情報に基づき）速やかに対応する。

また、けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断する。

次の点に留意して、いじめの早期発見に努める。

ア 保護者や地域、関係機関との連携

(ア) 保護者からの相談には、家庭訪問や面談により迅速かつ誠実に努める。

(イ) 必要に応じて、市民生活相談課、子育て支援課、教育相談センター、関係小中学校等の関係諸機関と連携して課題解決に臨む。

イ 児童生徒及び保護者からの情報収集

(ア) 毎学期（6月、11月、2月）、児童生徒及び保護者対象に「学校生活調査」を実施し、いじめの早期発見・早期対応に努める。

(イ) 「学校生活調査」の結果から、必要に応じて、速やかに個人面談を行う。

(ウ) 出席をとるときに一人一人の顔を見て声を聞く、「生活ノート」や「学級日誌の記述」等の活用、保健室の様子を聞く。

(エ) 聞いた内容は、5W1Hをメモし、後で情報を共有できるようにする。

(オ) 必要に応じ、保護者対象のアンケート調査を実施する。

ウ 「New I's」の活用【資料1, 2】

- (ア) 「いじめ発見のチェックポイント」を活用し、該当する項目がある児童生徒に声を掛け、該当する項目が複数あるときには、関係職員に相談する。
- (イ) 「いじめの見極めと状況別対応」を参考に、いじめの早期発見に向けた校内体制を確立する。
- (ウ) 「いじめの取組のチェックポイント」を活用し、指導体制、教育指導の在り方、早期発見・早期対応に向けた体制、家庭・地域との連携の在り方について学校を挙げて改善に努める。

(3) いじめに対する早期対応

いじめの発見・通報を受けた場合には、教職員が個人で判断したり、一部の教職員で抱え込んだりすることが無いよう、速やかに組織的に対応し、いじめられている児童生徒を守り通すとともに、いじめている児童生徒に対しては、当該児童生徒の人格の成長を旨として、教育的配慮の下、毅然とした態度で指導する。これらの対応について、教職員全員の共通理解、保護者の協力、関係機関・専門機関との連携の下で、次の点に留意して取り組む。

ア いじめている児童生徒への指導（「New I's」参照）

- (ア) いじめの事実関係・きっかけ・原因などの客観的な情報を収集する。
- (イ) 安全配慮義務に基づいて、事態に応じた適切な措置をとる。
- (ウ) いじめを完全にやめさせる。
- (エ) いじめは絶対に許されない行為であることを徹底的に理解させる。
- (オ) 人権と生命の尊さを理解させる。
- (カ) 多くの教書の協力を得ながら、指導を継続し、観察していく。
- (キ) 学級活動と通じて、役割・活動・発言の場を与え、認め成就感を持たせるとともに、教師との親しい人間関係をつくる。
- (ク) いじめは、複雑な心の危機やストレスのサインと受け止め、本人の問題理解に努めるとともに、問題を繰り返さないように心の成長を促す。

イ いじめられている児童生徒への支援（「New I's」参照）

- (ア) 秘密を守ること、必ず守り抜くことを約束しながら話し合う。
- (イ) いじめの事実を把握し、つらさや悔しさを受容し、共感的に理解する。
- (ウ) 不安を除去し、安全の確保に努める。
- (エ) 身近な大人に相談することの重要性を伝える。
- (オ) 自分の弱み・コンプレックスに対する否定的な見方や考え方をやめ、よい方向に自らを変えていけるようにする。
- (カ) 自己回復への積極的支援を行う。
- (キ) 不信感を抱いている対人関係の回復を支援する。
- (ク) 機会あるごとにコミュニケーションをもち、子どもとの信頼関係をつくる。
- (ケ) 自分の気持ちを自信を持って表現できるよう積極的支援を図る。

ウ 周りではやし立てる児童生徒への対応

- (ア) はやし立てることなどは、いじめ行為に加担する行為であることを理解させる。
- (イ) 被害者の気持ちになって考えさせ、いじめの加害者と同様の立場にあることに気づかせる。

エ 見て見ぬふりをする児童生徒への対応

- (ア) いじめは他人事でないことを理解させる。
- (イ) いじめを知らせる勇気をもたせる。
- (ウ) 防寒は、いじめの行為への加担と同じであることに気づかせる。

オ 学級への対応

- ① 話し合いなどを通して、いじめを考える。
- ② 見て見ぬふりをしないよう指導する。
- ③ 自らの意志によって、行動がとれるように指導する。
- ④ いじめは許さないという断固たる教師の姿勢を示す。
- ⑤ 道徳教育の充実を図る
- ⑥ 特別活動を通して、好ましい人間関係を築く。
- ⑦ 行事等を通して、学級の連帯感を育てる。

カ 他校の児童生徒が関わるいじめに関する対応

本校の教職員が、いじめに係る相談等において他校の児童生徒が関わるいじめの事実があると思われるときは、当該校への連絡、その他の適切な措置をとる。

キ 春日部市教育委員会への報告

- (ア) 法第23条第2項に基づき、いじめに対する措置の結果を春日部市教育委員会へ速やかに報告する。
- (イ) 犯罪行為として取り扱うべきいじめについては、教育委員会及び警察署等と連携して対処する。

(4) いじめへの対処

- ・ いじめの発見・通報を受けた場合には、速やかに組織的に対応し、いじめられている児童生徒を守り通すとともに、いじめを行った児童生徒に対しては、その児童生徒の人格の成長を念頭に置いた上で、毅然とした態度で指導する。
- ・ これらの対応については、教職員全員の共通理解、保護者の協力、関係機関との連携の下で取り組む。
- ・ いじめの事実の確認を行った結果については、教育委員会に報告する。
- ・ いじめを受けた児童生徒または、保護者に対する支援などを行う。
- ・ いじめを行った児童生徒に対する指導または、その保護者に対する助言等を行う。
- ・ いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものと認めるときは、警察署と連携する。

- ・いじめを受けた児童生徒と、いじめを行った児童生徒が、複数校にかかる場合は、関係校との情報連携を密に図り、関係児童生徒及びその保護者への支援と助言を行う。
- ・いじめに当たると判断した場合にも、その全てが厳しい指導を要する場合であるとは限らない。例えば、好意から行った行為が意図せずに相手側を傷つけたが、すぐに加害側が謝罪し教員の指導によらずして良好な関係を再び築くことができた場合等においては、学校は「いじめ」という言葉を使わずに指導するなど、柔軟な対応による対処も可能である。ただし、これらの場合であっても、法が定義するいじめに該当するため、事案を法第22条の学校いじめ対策組織へ情報提供する。

(5) いじめの解消

いじめは、単に謝罪をもって安易に解消とすることはできない。いじめが「解消している」状態とは、少なくとも次の二つの要件が満たされている必要がある。ただし、これらの要件が満たされている場合であっても、必要に応じ、他の事情を勘案して判断するものとする。

ア いじめに係る行動がやんでいること

- (ア) 被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。
この相当期間とは、少なくとも3ヶ月を目安とする。
- (イ) いじめ被害の重大性等から更に長期の期間が必要と判断された場合は、この目安にかかわらないこととする。

イ 被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと

- (ア) いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、被害児童生徒がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。
- (イ) 被害児童生徒本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。
- (ウ) 学校は、いじめが解消に至っていない段階では、被害児童生徒を徹底的に守り通し、その安全・安心を確保する。
- (エ) 学校いじめ対策組織においては、いじめが解消に至るまで被害児童生徒の支援を継続するため支援内容、情報共有、教職員の役割分担を含む対処プランを策定し、確実に実行する。
- (オ) いじめが「解消している」状態とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、学校の教職員は、当該いじめ被害児童生徒及び加害児童生徒については、日常的に注意深く観察する。

(6) 学校基本方針の内容の点検と見直し

取組の実効性を高めるため、学校基本方針が、学校の実情に即して適切に機能しているかを点検し、必要に応じて学校基本方針の見直しを行う。

第3 重大事態への対処

1 重大事態の定義【いじめ防止対策推進法 第28条】

(学校の設置者又はその設置する学校による対処)

学校の設置者又はその設置する学校は、次に掲げる場合には、その事態（以下「重大事態」という。）に対処し、及び当該重大事態と同種の事態の発生の防止に資するため、速やかに、当該学校の設置者又はその設置する学校の下に組織を設け、質問票の使用その他の適切な方法により当該重大事態に係る事実関係を明確にするための調査を行うものとする。

- 一 いじめにより当該学校に在籍する児童等の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき。
- 二 いじめにより当該学校に在籍する児童等が相当の期間学校を欠席する（年間30日を目安とし、一定期間連続して欠席している場合含む）ことを余儀なくされている疑いがあると認めるとき。
- 2 学校の設置者又はその設置する学校は、前項の規定による調査を行ったときは、当該調査に係るいじめを受けた児童等及びその保護者に対し、当該調査に係る重大事態の事実関係等その他の必要な情報を適切に提供するものとする。
- 3 第一項の規定により学校が調査を行う場合においては、当該学校の設置者は、同項の規定による調査及び前項の規定による情報の提供について必要な指導及び支援を行うものとする。

児童生徒又は保護者からの申立ては、

教育委員会及び学校は、詳細な調査を行わなければ、事案の全容は分からないということを第一に認識し、軽々に「いじめはなかった」、「学校に責任はない」という判断はしない。

2 重大事態への対処の流れ

- (1) 「重大事態」の意味を全関係者が理解しておく。いじめの事案で被害児童生徒が学校を退学・転学した場合は、退学・転学に至るほど精神的に苦痛を受けていたということであるため、生命心身財産重大事態に該当することを十分に考え、適切に対応を行う。
- (2) いじめられて重大事態に至ったという申出が児童生徒や保護者からあったときは、学校が把握していないいじめに関するきわめて重要な情報の可能性がある。そのことを踏まえ、重大事態としての調査にあたる。申立てについて調査をしないまま、いじめの重大事態でないと断言はしない。
- (3) 重大事態が発生した場合、本校は春日部市教育委員会へ事態発生について報告し、教

育委員会の指導を仰ぎながら事態へ対応していく。

(4) 本校は、推進委員会により当該重大事態に関する調査を行う。(個々の重大事態により、専門的知識及び経験を有する当該いじめ事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有しない第三者の参加を図る。) 詳細な調査を行わなければ、事案の全容は分からないことを第一に認識し、軽々に判断しない。

(5) (4) の調査は、客観的な事実関係を速やかに、正確に把握するための調査である。また、いじめ行為の事実関係を、可能な限り網羅的に明確にするものであり、因果関係の特定を急がない。また、法第23条第2項に基づき、本校として既に調査している事案であっても、重大事態となった時点で、本校は調査資料の再分析や必要に応じて新たな調査を実施する。

(6) (4) の調査に先立ち、アンケートにより得られた調査結果は、いじめられている児童生徒や保護者に提供する場合があることを調査対象となる児童生徒や保護者に、あらかじめ説明しておく。

(7) (4) の調査を行った推進委員会は、明らかになった事実関係をいじめられている生徒及びその保護者に適切に提供する。

(8) その他留意事項

ア 情報発信・報道対応については、プライバシーへの配慮の上、正確で一貫した情報提供が必要であり、初期の段階で情報がないからといって、トラブルや不適切な対応がなかったと決めつけることや、断片的な情報で誤解を与えることのないよう留意する。

イ 「New I's」の「Ⅱ 自殺予防対策編『資料』」も参考にする。特に、亡くなった生徒の尊厳の保持や、児童生徒の自殺は連鎖(後追い)の可能性があることなどを踏まえ、報道機関への対応に特別の注意が必要である。

ウ 関係のあった児童生徒が深く傷つき、他の児童生徒や保護者、地域にも不安や動揺が広がったり、時には事実に基づかない風評等が流れたりする場合もある。本校は、児童生徒や保護者への心のケアと落ち着いた学校生活を取り戻すための支援に努めるとともに、予断のない一貫した情報発信、個人のプライバシーへの配慮に留意する。

第4 その他いじめの防止等のための対策に関する重要事項

本校は、推進委員会において毎年度、江戸川小中学校基本方針にある各施策の効果を検証し、江戸川小中学校基本方針の見直しを検討する。検討の結果、必要があると認められるときは、その結果に基づいて必要な措置を講じる。

資料 「New I's」、「児童生徒指導リーフシリーズ(国立教育政策研究所)」